

報告

第四十一回經濟研究会報告

九月二十二日(火) 於 經濟学部研究室

発表者 今西正雄教授

座長 住谷悦治教授

テーマ ドイツ中世社会経済史

——ドイツ教会を中心として——

(出席者) 黒松、宗藤、松井、松山、小松、中島、相見、岩根、西川(良)、林、伊藤、西村、笹田、吉米、辻、岡、山下、小林、今村、西川(宏)、

ドイツの中世期は西欧諸国に比較して非常に多様性と複雑性をもって展開される。そしてその中世初期より中期にかけて著しい昇陽と発展をみながら、後期に至って他のフランス、イングランドにおける中央集権の樹立と市民階層の抬頭とは逆行した封建的再編成が強行され、遂に指導者の地位から転落を余儀なくせしめられる。

ドイツのかような転落には種々の原因が上げられるが、就中その地理的複雑性に基く自足経済の化石化、地域的分裂による分立状態の発展、帝権の頻繁なる交代と政治的中心の移動、ドイツ民族特有のスタム性格の強化、そして「ドイツ教会および修道院」

の極大的利用とその封建的世俗化に対する反動などが主な要素として働いたからである。

この報告は、「ドイツ教会および修道院」を中心にドイツ中世社会の推転を観察したものであって、同教会が中世初期および中期に亘って如何に華やかな文化・社会・経済的諸運動を展開し、ドイツ的文化と経済開発、ひいては「農民解放」に貢献したかを示すとともに、十三世紀後のいわゆる中世後期における教会の世俗化による封建反動がいかなる経路および形体を採って出現したかを検討したのである。そして、十六世紀の二十年代における「ドイツ大農民戦争」の基礎的諸条件も、実はこの中世後期の期間に準備されたものであることを検証したものである。

第四十二回經濟研究会報告

十月六日(火) 於 經濟学部研究室

発表者 笹田友三郎教授

座長 黒松巖教授

テーマ 地域分類と地域分析

(出席者) 中西、住谷、松井、宗藤、今西、相見、岩根、林、伊藤、西村、吉米、辻、岡、渡辺、山下、湯浅、小林、今村、西川(宏)

本報告にかんしては本二号七五頁に詳細が掲載されているので興味をもたれるかたはそれを参照されたい。

第四十三回經濟研究会報告

十月二十七日(火) 於 經濟学部研究室

發表者 相見志郎教授

座長 住谷悅治教授

テーマ アダム・スミスの重商主義論について

(出席者) 黒松、宗藤、松井、松山、小松、中島、岩根、西川(良)、岡谷、伊藤、西村、笹田、古米、辻、柳原、渡辺、山下、西川(宏)、

わが国におけるいわば重商主義論争ともいわれるものの核心は、重商主義成立の社会的基盤を、初期産業資本に求めるか、あるいは商業資本(その理解は多様であるが)に求めるか、にあるものと考えられる。ところで、重商主義成立の社会的基盤を初期産業資本に求める立場は、大塚久雄教授によって、最も基本的な礎石が据えられているわけであるが、教授の立論の背後には、重商主義(Mercantile System)という言葉をはじめて使用したアダム・スミスの重商主義論が、いわば権威的ともいうべき大きな比重を占めているように思われる。いわく、「最初にアダム・スミスが国富論第四編で重商主義と名付けて批判の俎上にのぼせたのは、明らかに名譽革命以降、なかならず十八世紀のイギリスにおいて支配的であった經濟政策の体系とその背景をなす經濟理論であった」と。

そこで、重商主義についての二つの対立した見解を、いかに把

握したらよいかの問題を究明してゆこうとすれば、こゝに、スミスの重商主義論をあらためて問題としてゆかなければならないであろう。私は、こうした観点に立つて、スミスの重商主義論を取り上げて論じたいと思うのであるが、その際、国富論の第四編のみを対象とするのでは不十分で、第三編の、いわばスミスの市民社会成立史論とも併わせて論じてゆく必要があると考える。そして、勿論、スミスの重商主義論は、国富論全体、いな、スミスの全体を通じて理解すべきものであるが、当面の問題にとつては、第三編、第四編を通じて理解してこそ、はじめて正しいスミスの重商主義論が把握できるであろう。そして私は、ここに商業資本の立場からする重商主義の把握をみるのである。